

氏 名	竹 村 晟 たけ むら あきら
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 136 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	イヌ、リンパ組織における髓外造血(1)

論文調査委員 (主 査)
教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

近来、堀井およびその共同研究者らは、一連の哺乳動物のリンパ節および、リンパ組織における幼若骨髓細胞巢（髓外造血）の検索を行なつて来た。かかる系統的な課題の一端として、イヌを用い生直後より成犬に至るまで各段階の個体の全リンパ節を観察し、骨髓性細胞の存在様式を明らかにするとともに、従来の報告がすべて骨髓球の有無のみにとどまったのであるが、一定の量的基準によって各例についての量的比較を行なったものである。

正常発育過程を追ひ、全25例のイヌの全身リンパ節を摘出し、ツェンケル・ホルモール固定を行ない、6 μ Celloidin 切片を作り、組織 Giemsa 染色標本を製作し、検鏡した。

(1) 顆粒球系造血、主として好中球造血であるが、生直後より15日頃まで著明であり、その後全体の傾向として減少するが、成熟個体に至るまで Schub をくり返し認められる。造血能の主体は髓索であり、血管周辺性に多く認め、一次リンパ節より二次リンパ節に多い傾向が見られる。

(2) 赤血球系造血、赤血球造血の最盛期は生後2日に見られ、以後は急激に減少し、生後10日を過ぎればほとんど痕跡的となる。主として髓索に正赤芽球を主体とする造血巣を、血管外性に Postcapillarvenen 周辺にしばしば認める。

(3) 巨核球系造血、生後2日例の髓索に6個の巣を認め、生後5日前後までは、しばしば認め得る。成熟個体にも時に出現し、皮質辺縁部にも見られる。

以上の結果、従来 Röhlich 等のとなえるリンパ節における髓外造血は単に胎生期の遺残であるという見方から脱して、生後においてもなお造血能の場合は、髓索に存続し、生体の必要に応じいつでも旺盛な髓外造血の場に転化し得ることを示すものといえる。またかかる造血巣が皮質より髓索に、一次リンパ節より、二次リンパ節に多いことは、リンパ球造成についての構造的部位差と、機能的部位差との相関関係にも一致するものである。

論文審査の結果の要旨

著者は生直後から成熟にいたる25例の正常イヌの全身リンパ節について、Helly 固定、連続切片のGiemsa 染色標本について、骨髓性造血巣の検索を行なって、つぎのような所見を得た。

1) 顆粒球（主として好中球）造血巣については、生直後から生後15日ころまで、顕著に出現する。生後45日以後はかなりいちじるしい減少を示すが、成熟にいたるまで Schub をくりかえして断続出現する。出現部位は髄索、周血管性で、二次小節内には認められない。リンパ節の部位差による出現の変異としては、一般に二次リンパ節の方が一次リンパ節よりも出現頻度は高い。

2) 赤血球造血巣

赤血球造血はリンパ節においては、生後2日にその最盛期を示し、その後急激に減少し、生後10日をすぎれば痕跡的となる。髄索および皮質辺縁部、周血管性に出現する。

3) 巨核球

幼若巨核球は生後2日の例にもっとも多く、生後5日ころまではしばしばみられる。その後減少するが、成熟個体でもときにみられる。出現部位は髄索が主であるが、成熟個体では皮質辺縁部にみられる。

本研究は学術上有益であり医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。